

第5章 同一性発話の意味論

暫定的提案：同一性発話の意味を理解すること＝両辺の名詞句を理解し、それらの指示対象の同一性を理解すること

2 同一性発話の両辺の指示対象の同一性を理解すること

(1) 同一性発話の区別

・発語内行為による区別

同一性記述発話：両辺の同一性を記述する発話

同一性宣言発話：両辺の同一性を宣言する発話

・同一性記述発話の4つの分類 (参照、クリプキ『名指しと必然』)

①アприオリで必然的な同一性発話 「 $1 + 1 = 2$ 」

②アприオリで偶然的な同一性発話 「1メートル=棒Sの長さ」

③アポステリオリで必然的な同一性発話 「エベレスト=ゴーリサンカー」

④アポステリオリで偶然的な同一性発話 「Xさんの車=あの赤い車」

・①と②の区別について。語はすべて定義によって意味を持つのだとすると、①はすべて②なのではないかと思われるかもしれない。しかし、そうではない。なぜなら、棒Sの長さが1メートルでない世界は可能であるが、 $1 + 1 = 2$ でない世界は不可能であるからである。なぜ後者が不可能かといえば、「2」は固定指示詞だからである。仮に1, 3, 2, 4, 5, 6, …という数列が定義された世界があるとすると、そこでは「 $1 + 1 = 3$ 」「 $3 + 1 = 2$ 」となる。しかし、そこでの「2」は上記の「2」とは異なる対象を指示している。上記の「2」が指示しているのは、その世界で「3」が指示している対象である。

・①と③の区別について。①と③の両辺がともに固定指示詞であるとすると、①と③の違いはなぜ生じるのだろうか。「性質Fを持つ数=性質Gをもつ数」が成立するならば、これもまた①に属するだろう。しかし、これはまだ証明されていないとしよう。「エベレスト=ゴーリサンカー」は経験／事実によって知られた。これに対して「性質Fを持つ数=性質Gをもつ数」は証明によって知られる。つまり表現の意味だけによって論理的に知られるので、これはアприオリで必然的な同一性発話になる。

注：二種類の否定文の区別

$A = \sim B$ 無脊椎動物=脊椎動物でない動物

$A \neq B$ 脊椎動物≠無脊椎動物

(2) 同一性記述発話の両辺の指示対象の同一性を知る仕方

両者の同一性/非同一性を知る仕方は、次の二つに分けられる。

(1)両辺の表現の意味だけに基づく場合(アприオリに知る場合)

(2)両辺の表現の意味と経験に基づく場合(アポステリオリに知る場合)

(1)意味だけに基づいて同一性言明が正しいといえるためには、意味が分かればよく、両辺の指示対象にたどり着く必要はない。(「三角形=三つの辺をもつ図形」)

(2)意味と経験にもとづいて同一性言明が正しいことに辿りつくということは、意味だけに基づいて両辺の指示対象の同一性にたどりつかないということであり、左右の名詞句の指示対象に独立に辿りつくことができなければな

らない。

(もしクワインが指摘したように意味論的規則により真であることと、事実によって真であることを区別できないとすると、この①と②の区別もできないことになる。 クワインの証明は、<文の意味だけに基づいて真である文は、意味論的規則にだけ基づいて真である文であり、何が意味論的規則であるかは、経験に基づく。したがって真理を分析的と総合的に区別できない>と論証するものであった。仮に意味論的規則を規約によって決定したとしても、意味論的規則だけに基づく真理と経験を必要とする真理に区別することはできない。なぜなら、意味論的規則の適用の規則が必要になり、おなじ問題が反復するからである。デイヴィッドソンの根源的解釈においても、同一性言明が、意味に基づいて同意されているのか、事実に基づいて同意されているのかの区別ができないだろう。)

(A)両辺の表現の意味を理解するだけで

- (a) 同一性の成立が解る場合。「Xの父親=Xの男性の親」「Xの一人息子=Xの長男」
- (b) 非同一性の成立が解る場合。「赤≠青」「Xの父≠Xの母」
- (c) 同一性値が解らない場合。「この花の色=赤」

一階述語論理については、文がトートロジーであるか、矛盾であるか、事実式であるかを決定するアルゴリズムは存在しない。私たちの自然言語は一階述語論理を含むより一層複雑な言語であるので、与えられた同一性文が成り立つかどうか決定するアルゴリズムは存在しない。したがって、すべての同一性発話を(a) (b) (c)のどれに分類されるのかを決定するアルゴリズムは存在しない。(分析と総合への区別へのクワインによる批判が妥当かどうかと、ここでの非決定性の主張は独立の問題である。なぜなら、？？？)

上記の(a)と(b)は指示対象にたどり着いても、同一性値は変化しない。

上記の(c)は、(i) (ii) (iii)に分かれる。

(B)両辺の表現の意味を理解し、かつ指示対象にたどり着くことによって

- (i) 同一性の成立が解る場合。「この花の色=赤」
- (ii) 非同一性の成立が解る場合。「あの花の色≠赤」
- (iii) 同一性値が解らない場合。「宵の明星=明けの明星」

(a)意味だけに基づいて両辺の指示対象の同一性がわかる場合

・意味だけに基づいて成り立つ同一性言明のもつとも単純なものは、同一律「A=A」である。

- ①任意の表現Aについて、「A=A」が成り立つ。もしこれが成り立たないならば、それは有意味な表現として使用できない。
- ②それと同様に、もある表現が有意味に使用できるならば、「何がAと同一ではないか」「A≠？」という問い合わせに答えられる必要がある。
- ③任意の表現 A について、「A=B」が成り立つような、他の表現「B」が存在する。もしそれが存在しなければ、私たちは「A」を定義できることになり、それを有意味に使用できないだろう。

・「A」が固有名であっても、このことが成り立つ。なぜなら、固有名はたしかに「A=これ」という発話で定義できるが、しかしこのような仕方でしか定義できないのだとすると、私たちはその対象を同定できないだろう。なぜなら、「これ」の指示対象の同定には他の表現、例えば「これ=B」が必要であり、「これ=B」が成り立つなら「A=B」が成り立つ。ゆえに、もし「A=B」がなり立たないならば、「A=これ」も成り立たないことになるからである。対象を同定するには、それを別の仕方で指示することができる必要があり、それを指示する別の表現を必要とするからである。「これが淀川だ」と言われて「淀川」の指示対象を理解したのなら、その人は別の仕方でも、その対象を表現できるに違いない。さもなければ、「淀川」を用いた他の発話、例えば「淀川は、私が昨日教えてもらった川だ」というよう

な発言することができなくなるからである。したがって一般に、表現についてのある定義を理解することは、同時に他の多くの表現の可能性を理解することである。

(Fichte は「A=A」は「自我=自我」によって可能になると考へたが、私たちは「A=A」は言語、ないし言語共同体によって可能になるといえる。もっとも、フィヒテの「自我」を「言語ないし言語共同体」であると解釈できるかもしれない。)

(対象を同定できるのならば、「これ」と指示して、もう一度「これ」と指示できるだろう。このような再同定ができないなら、対象を同定できるとはいえないし、対象を同定できないなら対象を指示することもできない。つまり、「これ=これ」という同一性言明が可能になる。対象を指示するには、対象の同定が必要であり、対象の同定のためには、対象の再同定が必要である。再同定は、同一性言明として可能になる。)

・同一性(同一性言明の真理性)は、存在にコミットしない。「丸い四角=丸い四角」は真であるが、「丸い四角」は存在しない。この同一性言明は「丸い四角」が存在することにコミットしていない。同一性言明の真理性は、左右の名詞句の指示対象が存在することにコミットしていない。

・表現の意味を理解しても、その指示対象と同一の指示対象をもつことが意味だけから解るすべての表現を理解しているとは限らない。数学や論理学では、意味だけで成り立つ同一性言明の証明が課題となっている。(これに対して、日常会話では、意味だけで成り立つ同一性言明の多くは自明なものであるので、それが問い合わせの答えとして發せられることは少ないだろう。しかし、それは問い合わせるために答えるための推論の自明な前提としてしばしば利用される。)

②同一性発話の両辺の同一性値が、表現の意味の理解だけからは知ることができず、事実に問い合わせる必要がある場合。

この場合には、両辺の表現の指示対象を知る必要がある。

「二等辺三角形の集合=二等角三角形の集合」

「私の車=あの赤い車」

「オバマ=最初のアフリカ系アメリカ大統領」

なぜなら、一方の指示対象だけが解っても、他方の指示対象が解らなければ、同一であるかどうかを判定することはできないからである。それでは、両辺の指示対象を別々に理解したのち、それらが同一であることを知るのだろうか。

問答においてはそうなっていない。「Xさんの車はどれですか」と尋ねる人は、「Xさんの車」の意味は分かつているが、その指示対象を知らない。そして「あの赤い車です」と答える者は、「Xさんの車」の意味が解るだけでなく、その指示対象を知っており、その対象に質問者がたどり着けるように「あの赤い車」という表現で指示する。

質問した人は、この返答から、「Xさんの車=あの赤い車」を理解する。つまり、質問者は、「あの赤い車」の意味からその指示対象にたどり着き、それがXさんの車であると知ることになる。つまり「Xさんの車=あの赤い車」が成り立つことを知ることになる。

この問答では、同一性言明の両辺の名詞句は独立に与えられて、それぞれの指示対象に独立にたどり着いて、その後で二つの指示対象が同一であることを知るのではない。

質問した者は、「Xさんの車」の名詞句の意味を知っているが、その指示対象を知らず。「あの車です」という返答から、「あの車」の名詞句の意味を理解し、その指示対象にたどり着く。そして、その返事が「Xさんの車はどれですか」という質問への答えであることから、「あの車」の指示対象が、Xさんの車であると信じるようになる。つまり「あの車=Xさんの車」を信じるようになる。

質問者にとって：表現「Xさんの車」、⇒ 表現「あの赤い車」→指示対象、⇒ 「Xさんの車=あの赤い車」、
⇒ 表現「Xさんの車」→指示対象

返答者は、「Xさんの車」の意味を理解し、それからその指示対象にたどりつき、その指示対象を質問者に示すために「あの車」という表現を考える。返答する者が、「あの車」という表現を考えたのは、指示すべき対象がすでに与えられていて、その対象へと質問者がたどり着くための表現をもとめて考えた答えなのである。

返答者にとって：「Xさんの車」→指示対象、⇒ 指示対象→「あの赤い車」

・別の例での説明：「それは赤いですか？」と尋ねられた時、「それは何色だろう？」と自問し「それは赤色だ」と自答して、「その色=赤い」を得て、「はい、赤色です」と返答するのではないだろうか。

表現「その色」→指示対象、⇒ 指示対象→表現「赤色」、⇒ 「その色=赤色」

・まとめ：問答における同一性記述発話の理解

問答の分析からわることは、<「A=B」の理解は、「A」と「B」の意味を理解し、次にそれぞれの指示対象の同一性を理解することではない>ということである。

返答者にとっては、「A」→O、⇒ O→「B」、⇒ 「A=B」

質問者にとっては、「A」、⇒「A=B」、⇒「B」→O、⇒「A」→O

③両辺の名詞句の意味を理解し、事実に問い合わせても、同一性値が解らない場合。

「A=B?」と問われて、名詞句の意味を理解できるが、事実に問い合わせようとしても、同一性値が解らない場合は、次の二つの場合が考えられる。

(a)「A」の指示対象も、「B」の指示対象も、どちらもわからない場合。

(b)「A」の指示対象にたどり着くが、しかしそれが「B」の指示対象になるかどうか解らない場合。

(c)「A」の指示対象と「B」の指示対象にたどり着くが、しかしそれらが同一かどうかわからない場合。

(a)の例？

(b)の例。「Xの車はあの赤い車ですか？」と問われて、それに答えられない場合がそうである。このとき、「あの赤い車」の指示対象はわかつても、それが「Xの車」であるかどうかが解らない。

(c)の例。「ヘスペラス=フォスフォラス」についてのある疑問

「明けの明星=宵の明星」

Frege は、両辺の表現は同一対象を指示し、異なる与えられ方を意味するという。（そのように考えると、これはクリップキがいうように、アポステリオリで必然的な同一性言明である。）しかし、これらは、同一対象の異なる現象を指示すると考えることもできる。こう考えるとき「明けの明星=宵の明星」は正確には成り立たない。なぜならこれら語の指示対象は、異なる対象だからである。では正確にはどういうべきだろうか、「明けの明星」は二義的であり、「明け方に東の空に見えるがその見え方とは独立に存在するものとしての星」と「明け方に東の空に見えているときのその星」である。「明け方に見えているときの金星」と「夕方に見えているときの金星」は異なるだろう。（この場合には、明けの明星と宵の明星が異なる惑星である可能世界も考えられる。その世界では、この同一性言明は、アポステリオリで偶然的な同一性言明である。）

・「私の車=あの赤い車」この両辺も、Frege にならって、同一対象を指示する、異なる与えられ方を意味する名詞句だと考えてきた。しかし、この二つのある対象の異なる側面(性質)を指示しているということもできる。例えば、「あの赤い車はあなたの車ですか」と問われて、「そうだろうと思いますが、私の車はよくある車なので、ここからでは判断できません」と答えるとき、返答する者は、「あの車」の指示対象はわかつており、「私の車」

の指示対象もわかっているが、しかしその二つが同一であるかどうかはわからない。そうすると、次のように書き換えるべきだろうか。

「私の車であるもの=あの赤い車であるもの」

(2) 同一性宣言発話の両辺の指示対象の同一性を知る仕方

同一性宣言発話は、記述ではないので、意味内容の理解だけによっても、意味内容の理解と事実/経験によっても、その同一性値はわからない。

同一性宣言発話「A=B」は、この発話によって「A」の指示対象と、「B」の指示対象を同一のものと設定する発話である。これは、語や概念のいわゆる定義や名付けの場合と、命令や約束のような発話に分かれる。

同一性宣言発話の理解：

発話者は、左辺の表現の具体的な指示対象を、右辺の表現によって与えようとする。

聞き手は、両辺の表現の意味を理解し、聞き手がそれらの指示対象が同一であるとみなすことを発話者が意図していることを理解する。

(A) 定義の理解

定義はつきのような問い合わせの答えとして、成立する。

「1メートルの長さをどう決めますか」「一メートルは棒Sの長さである」

これには真偽はない。しかし、定義された後に、「1メートルはどの長さですか」と問われて「1メートルは、棒Sの長さである」と答えるとき、これは記述であり、真理値を持つ(アприオリで偶然的に真である)。

(これに対して、「私が注文するもの=うどん」の場合には、厳密には、「私が注文したもの=うどん」となる。同じ発話を繰り返しても、無効(?)である。)

(B) 意図決定の発話の理解

次の例で考察しよう。

「何になさいますか」「うどんにします」

この問答の結果は、「私が注文するもの=うどん」という同一性発話である。この質問に返答する者は、何を注文するかを決めなければならない。つまり「注文するもの」の指示対象を決定する必要がある。質問に陰伏的に含まれる「あなたの注文するもの」を理解しても、その指示対象は与えられない。その指示対象は未定であり、返答者にはその決定が求められている。返答者がそれを決定することによって指示対象が成立する。

しかしここで、返答者は、その指示対象を相手に伝えるために「うどん」という表現でそれを呼ぶのではない。つまり、指示対象を決定したのちに、それを指示する表現を探し出すのではない。返答者が、「注文するもの」を決めるとき、<うどん>(「うどん」の指示対象)に決めるのである。

返答者にとって：表現「私が注文するもの」→指示対象(=うどん)、⇒表現「うどん」

質問者にとって：表現「あなたが注文するもの」、⇒表現「うどん」→指示対象、

⇒表現「あなたが注文するもの=うどん」

・まとめ：問答における同一性宣言発話の理解

問答の分析からわかるることは、<「A=B」の理解は、「A」と「B」の意味を理解し、次にそれぞれの指示対象の同一性を理解することではない>ということである。

返答者にとって、「A=?」(問い合わせ) ⇒ 「A」→O、O←「B」、「B」(返答)

質問者にとっては、「A=?」(問い合わせ) \Rightarrow 「B」、「B」 \rightarrow O、「A=B」